

学際的コミュニケーションツールとしてのフィールドノート

ワークショップ開催日: 2016年3月5日(京都リサーチパーク町家スタジオ)

【概要】

フィールドワーカーはフィールドノートをつける。本企画ではこの素朴な事実に着目し、多彩な分野の研究者がそれぞれのフィールドノートを持ち寄って、フィールドノートを書く/描く手法やその研究上の意味をそれぞれの経験に沿って発表した。コメンテーターからは日本におけるフィールドノートの歴史的展開や、地域研究の現状を踏まえた上で、フィールドノートが特にコミュニケーションツールとして人びとをつなぐ可能性が期待されるといった指摘があり、その他博物館展示などの応用についても活発な議論が交わされた。

【成果出版】

梶丸岳・丹羽朋子・椎野若菜(編)『フィールドノート古今東西』古今書院(2016年4月出版予定)

【当日プログラム】

多彩な記録媒体の総体としての現代「フィールドノート」と「記録」すること

- ・小森真樹(ミュージアム研究): ミュージアム研究における多様な記録媒体による調査手法

現地の人びととのあいだをつなぐコミュニケーションメディアとしてのフィールドノート

- ・山口未花子(生態人類学): 「書く」ことの意味ー調査地の価値観とフィールドノート
- ・丹羽朋子(文化人類学): 研究者と現地をつなぐフィールドノート

フォーマットの決まったフィールドノートのスタイルとその応用

- ・安永数明(気象学): 気象観測におけるフォーマット化されたフィールドノートの役割
- ・阿児雄之(文化財科学): 遺跡探査とフィールドノート

【コメント】

角南聡一郎(民俗学・考古学, 元興寺文化財研究所)

村尾るみこ(地域研究, 立教大学)

ディスカッション

「フィールドノートを生かすにはー学際と地域還元」



当日の様子